

日本社会心理学会会報

212号

発行 日本社会心理学会 <http://www.socialpsychology.jp/>

編集・制作 広報委員会(担当常任理事:三浦麻子)

2016年12月20日

日本社会心理学会第57回大会・開催報告

日本社会心理学会第57回大会は2016年9月17日と18日に開催されました。前号では開催速報をお届けしましたが、今号では「研究という愉悦に浸る場」あるいは「熱い議論を戦わせる学堂」での体験を、お二人の参加者からご紹介いただきます。

概要報告

期日:2016年9月17日~9月18日

会場:関西学院大学西宮上ヶ原キャンパス

準備委員長:三浦麻子

1. 参加者数 775名(予約参加502名,当日参加者273名,うち招待者37名)
2. 発表件数 招待講演1件,シンポジウム2件,大会準備委員会企画ワークショップ2件,自主企画ワークショップ5件
口頭発表103件,ポスター発表294件

発表取消

口頭 O205-4 呂珂・山崎瑞紀, O103-2 高岸治人・松本良恵・李楊・Alan Fermin・金井良太・山岸俊男

ポスター P2348 友野聡子, P2124 尾崎由佳

大会参加記

大会初日は、台風16号が心配されつつも、雨風に悩まされることなく無事始まりました。受付では参加者ひとり一人に、準備委員長御自ら団扇を手渡されており「あさりん三人」説の一端を垣間見たように思いました。少し蒸し暑かったので、団扇は素敵なプレゼントになりました。

最初にお邪魔した口頭発表「対人的相互作用」のなかで最も興味深かったのは、上條菜美子先生の「ストレスフルな体験の意味づけに関する縦断的検討」でした。主な知見として、意図的熟考(個人間)が意味生成を促すことを見い出されており、非常に応用的価値の高い研究だと思いました。次の口頭発表「身近な人間関係」では、仲嶺真先生の「Sociosexualityと街中での話しかけ方」に対して金政先生が、話しかける男性の外見的魅力によって、女性の評価は異なる可能性を指摘されたことが印象に残りました。ちなみに、この指摘については後程、浦先生とも議論になりました。

午後はWS「社会心理学を、英語で教えてみませんか?」にお邪魔しました。企画者の大坪庸介先生とアダム・スミス先生が作成された、英語と日本語を併記した教科書は、英語の本を日本語でレジュメにまとめる際や、英語の論文を執筆する際にも役に立つのではないかと感じました。また、話題提供された中島健一郎先生は、社会心理学の演習を英語で行うにあたり大変努力されており、感銘を受けました。続いて話題提供された一言英文先生は、学生に社会心理学を日常から「感得」してもらうため、ある共通主題について各学生が撮影してきた写真について議論する「参加型写真投影法」や、課外授業を取り入れられており、学生にとっても教員にとっても楽しそうな授業だなと思いました。

第1日最後のWS「次世代学際研究への社会心理学の挑戦」はAntonio Terracciano先生によるAlzheimerと性格の関連についての話題提供に始まり、企画者の平井啓先生を初め、話題提供者の先生方が、学際研究に取り組みされるに至った経緯を語られました。かおり先生は、実践的興味から様々な異分野学問との学際研究に取り組まれているとのことで、知的好奇心の重要性を改めて認識する好機になりました。

第2日は、スコールのような雨のなか、口頭発表「集団1」にお邪魔しました。井上裕香子先生の「相利協働行動は利他行動を促進するか?」では、単に一緒に行動するだけでなく、協働することでより大きな利益を得る経験が、将来の協力行動に繋がることをきちんと示されており、納得すると共に感心しました。続く口頭発表「社会的交換」では、竹澤正哲先生が「対応バイアスの合理性:ベイズ推定モデルを用いた実証的検討」のなかで、対応バイアスが合理的推論によって必然的に生じる可能性を指摘されており、徐々に目から鱗が落ちました。

シンポジウム「比較することの意味と意義」は、動物&ランチの為か、とても和やかな雰囲気でした。なかでも菊水健史先生の「ヒトとイヌの共生から見えてきたこと」では、わんこと飼い主の見つめ合いがOxytocinを高めることを、動画を交えながら説明されており、ほっこり温かい気分になりました。

帰りは、阪急電車のなかで村田先生発見! 学会長のお役目、お疲れ様でした。最後になりますが、準備委員会の先生方をはじめ、大会運営に御尽力された皆さまに心より御礼申し上げます。有り難うございました。

大高瑞郁



(おたか みずか・山梨学院大学)

私は今回で3度目の参加とまだ多くを知らない身ではありますが、今回このような体験記を書かせていただく機会をいただきましたので、僭越ながら感じたことをいくつか書かせていただきたいと思います。

まず、私が今年の大会で参加させていただいたセッションや発表について全体的に感じたことは、どの場所でも活発に議論が展開されており、かといって決まった方々ばかりが話しているという雰囲気ではなく、幅広く意見が飛び交っていたということです。また、ポスター発表も会場の密度もあってか、参加者間の距離が近く、自然に会話に入り込むことができ、今まで参加させていただいていたときよりも活気のある場になっていたのではないかと感じました。私も口頭発表を行わせていただきましたが、いい意味で和やかな雰囲気の中発表ができ意見を交わせたかなと思います。

様々な発表があった中で、私は環境やリスクといった問題に関心があるため、やや偏った見方になってしまうことをご容赦いただいたうえで、今年東日本大震災から5年という節目、そして熊本の地震の起こった年であることもあり、震災や災害の「その後」に焦点を当てた研究を中心に発表を聞かせていただきました。それぞれの研究の切り口は様々で、震災の経験と防災意識の風化や、災害への対処行動を促すための地震長期予測地図の作成、買い控えを抑制するリテラシーの影響、客観的指標の震度と揺れの大きさの主観的評価の違い、震災後からの様々な社会におけるリスク認知や信頼の変化など、東日本大震災をきっかけに広がっていった研究を2日間かけて聞いて過ごすという貴重な時間となりました。ただ、その一方で熊本地震の災害復興の現場における取組の報告はあったものの、被災地の現場に踏み込んで行った研究はやや少なかったという印象を受けました。

また、平石先生らの企画された自主企画ワークショップ「災害リスク研究の次を考える:東日本大震災、福島第一原発事故を踏まえて」では、今後どのような研究があればこの先起こるかもしれない災害等につながる知見を得られるのかについて会場全体で議論がなされ、参加された先生方の抱く様々な問題意識やアイデアの一端を知ることができる非常に有益な機会となりました。

話は変わりますが、私もいくつかの学会に参加し発表させていただく機会があったのですが、その中でも社会心理学会大会は、同じ世代の若手研究者が多く、気楽に語り合える機会として貴重な時間でもあります。それと同時に、どこなく肩身の狭い思いをすることもあります。社会心理学を用いた応用的な研究を行っている方はそれぞれ個別の専門的なコミュニティの中で学会発表を行う機会も多く、このような様々な分野がまたがる場に関わることは億劫になりがちかもしれません。しかし、私は社会心理学会大会が社会心理学全体における自分の研究の立ち位置を確認し、「似た者同士」の中では生まれなかった新しい視点からのコメントを得るために重要な意味を持ちえると考えています。これからは社会心理学会大会が研究の多様性を広げながらそれが新たな研究を生み出す場になる可能性を残すためにも、院生をはじめより多くの応用・実践的研究をなさっている(と自負する)諸先生方の参加が増えていけばいいなと思います。

(こぼやし つばさ・北海道大学)



名誉会員推戴・榊博文先生

日本社会心理学会の名誉会員は、既に満70歳に達している、あるいは当該年度内に満70歳に達する会員から、内規に従い適格とされた方を、理事会への提案・賛同を経て推戴するものです。榊博文先生の日本社会心理学会に対するこれまでのご貢献に、心より感謝申し上げます。

この度は、名誉会員に推薦していただき、誠にありがとうございました。16年間も日本社会心理学会の役員をしていたと知らされ、自分でも驚いています。私は慶應高校から慶應義塾大学経済学部に進学しましたが、日本の経済学者は「経済学学者」であることに失望し、高校の頃から関心のあった「心理学」を勉強したいと、大学院修士課程では心理学専攻に進みました。しかし、慶應の心理学はネズミとハトの心理学であることが判明し、事前に調べなかったのがいけなかったのですが、又しても失望し、博士課程では社会学専攻に進み、そこでようやく「人間の心理学」に出会いました。「社会心理学」との出会いです。

中でも、態度変容の分野に惹かれ、以来ずっと態度変容(説得)研究に従事しています。しかし、人に誘われて、デマの研究、あがりの研究、交通心理学の研究、異文化適応の研究、地震災害時の人間行動の研究などにも従事し、「経済学講義」などという本も書きました。又、自らの関心から、「カルト」の研究、いいところでCMに入る「山場CM」の比較文化的研究、及び普及研究分野における「異文化間屈折研究」も行いました。ですから、態度変容研究に30年もの歳月を費やすことになりました。

特に関心を持ったのは「ブーメラン効果」(説得方向とは逆方向への態度変容)でした。認知的不協和理論、社会判断理論、心理的リアクタンス理論は、それぞれ基本的立場は異なるのですが、自分と説得者との間の意見の食い違い、いわゆる Communication Discrepancy、又は Message Opinion Discrepancy と言いますが、このディスクリパンシーが大きい時にブーメラン効果が生じると予測しています。しかし、私の一連の研究はこの予測を支持しませんでした。意見の食い違いが小さい時に、つまり自分の意見と同じようなことを言われた時にブーメラン効果が生じ、ディスクリパンシーが大きい時に人は相手の言うことをよくきくのです。1回目の意見測定と2回目の意見測定の間隔を、2週間おいたり4週間おいたり、実験条件を実にさまざまに変えても結果は同じでした。私は、これは日本人特有の現象ではないかと考え、ドイツでも実験を行いました。結果は同じでした。更には、「ディスクリパンシーの程度」を被験者自身に判断させる実験や、それに加えて態度変容自体を被験者自身に測定させて、実験者は一切手出し出来ないような実験も行いましたが、結果は同じでした。更には、日常生活の中の何げない会話の観察をし、相手が何か強い主張をした時に、こちら(実験協力者)が同様の主張をすると、相手は態度を逆方向に変えることも判明しました。私は、アメリカの3つ



の理論ではこれらの結果を説明出来ないと思い、自らの理論を1994年から構築し始めており、定年間近になって「認知の陰陽理論—日本生まれの態度変容理論—」を出版することが出来たのは幸いでした。

人は自分の意見と同じ意見を言われると、「そうだ。そうだよね」とはならず、「いや、そうじゃないんじゃないか」となって、自分の意見を逆方向に変えるとは、興味深いと思いませんか？勿論、「そうだよね」となる人もいますが、人数を沢山とって平均値を出すで「そうじゃないんじゃないか」となるのです。これは頭脳の中の反応ですので、私はこれを「ブーメラン反応」と名づけ、この現象の心的メカニズムを扱った「ブーメラン効果の研究—人は何故自己の意見と同じ意見を主張されると自己の意見を逆方向に変えるのか？—」という論文を、2016年10月発行の「説得交渉学研究」第8巻に書きましたので興味ある方は是非ご覧ください。又、研究同僚の手によって、「認知の陰陽理論による社会現象の説明」に関する論文も、「説得交渉学研究」3巻、4巻、5巻、6巻、7巻に載っています。例えば、企業側が、顧客や消費者が考えていることと同じことを言うと、顧客や消費者は「そうじゃないんじゃないか現象」を起こしたり、反対行動をとる事例が沢山でています。ご覧いただければ幸いです。

態度変容研究者が、最近少なくなっているようですが、人の一生は説得の連続ですので、態度研究、態度変容研究は実践的でもあります。この研究分野の延長線上に、広告、宣伝、流行、普及などの研究分野があり、個別的には、恋愛、結婚、教育、就職、営業、管理、情報、昇進、リーダーシップ、経営、医療、看護、介護、福祉、警察、弁護、行政、財政、税務、異文化、交渉、国際取引、選挙戦術、選挙演説、戦闘、戦争、核廃絶などまで応用がきくのです。日本社会心理学会から、もっと多くの態度研究者、態度変容研究者が、輩出することを願っています。

(さかき ひろぶみ)

2016年度日本社会心理学会賞 第18回選考結果のお知らせ

今年も例年にならった方法により論文賞および出版賞の選考が行われました。慎重に審議した結果、下記の各論文と著作が授賞対象として選出されました。

○優秀論文賞

慎重な選考の結果、本年度の優秀論文賞は該当なしと決まりました。

○奨励論文賞

三浦麻子(Asako Miura)・小林哲郎(Tetsuro Kobayashi)

『オンライン調査モニタの Satisfice に関する実験的研究』(第31巻1号, pp. 1-12)

本研究は、オンライン調査において、回答者が、必要最小限の注意しか払わずに回答する現象であるSatisficeの出現する程度を比較検討したものである。効率的な調査方法として将来に渡って拡大・浸透する可能性の高い方法論について、その課題ならびに克服するための方途を検討する優れた着眼点と社会心理学研究法の発展への貢献が高く評価された。また刺激的な方法論を取り入れることで、学会を超えて多方面の関心と議論を呼んだ点も高く評価された。

岩谷舟真(Shuma Iwatani)・村本由紀子(Yukiko Muramoto)

『多元的無知の先行因とその帰結:個人の認知・行動的側面の実験的検討』(第31巻2号, pp. 101-111)

本研究は、多元的無知(pluralistic ignorance)現象の生起、維持、再生産の一連のプロセスにおける個人の認知と行動の特性について実験室実験を行って検討したものである。丁寧な先行研究のレビューに基づく精密で優れた問題設定が高く評価された。また、方法論的に課題を残してはいるものの、その課題を克服することで、さらに高度な研究へと発展する将来性への強い期待を抱かせる点も高く評価された。

○出版賞

高史明(Fumiaki Taka)

『レイシズムを解剖する: 在日コリアンへの偏見とインターネット』(勁草書房)

本著は、在日コリアンに対する新旧の異なる偏見とレイシズムに着目し、それらがどのような関係にあるか検討することを起点として、偏見を持つ人々がもともと右翼的傾向を持っているのか、インターネットの利用との関係はあるのか等、オリジナルな視点から議論、考察したものである。学術書としてのオリジナリティの高さに加えて、議論構成の緻密さが高く評価された。

大淵憲一(Ken-ichi Ohbuchi)

『失敗しない謝り方』(CCC メディアハウス)

本著は、著者が積み重ねて来た謝罪行動に関する社会心理学的研究の成果を、広く一般読者の関心と理解を得られるように書かれたものである。研究成果が高度に学術的価値を持つものであることは、著者によって既に公刊された学術専門書でも確認できるものである。今回、その確かな研究成果を広く読者にわかりやすく伝えることで、社会心理学の研究成果を広く理解されるように社会に発信した点が高く評価された。



○選考委員会

委員長:山口裕幸

委員:相川充, 橋本剛, 大江朋子, 元吉忠寛, 池上知子, 長谷川孝治(理事), 稲葉哲郎, 金政祐司, 大坪庸介, 村本由紀子(会員)

(文責:山口裕幸・常任理事/選考委員長)

受賞者のことば

三浦麻子

このたびは奨励論文賞をいただき、どうもありがとうございます。「この研究で是非」と思っていた論文で受賞できて、とてもうれしいです。

受賞理由として、社会心理学のみならず関連領域に与えたインパクトの大きさを挙げていただきました。そのきっかけになったのは朝日新聞(2015年9月29日付)の記事だと思います。「手抜き」という見出しが挑発的だったからか、メディア効果の研究でも共同しているわれわれも驚くほどに、報道の威力は絶大でした。J-Stageの論文閲覧・ダウンロード数が跳ね上がったのはうれしかったのですが、オンライン調査会社からも様々なリアクションがありました。数社が、わが社のモニタの品質管理は厳格で何の問題もありません、というプレスリリースを出されました。それはまあ当然の反応かなと思いましたが、われわれに共通する共同研究者とある調査会社にデータ収集を委託しようとしたところ、「この調査に三浦・小林は関係していないか」という問い合わせ電話があったのには仰天しました。研究に着手したきっかけが、研究者のみならず調査会社にもオンライン調査がはらむ危うさに自覚的になってもらいたいという思いだけだけに、「なんでそうなるの…」ととても残念な気持ちになりました。もちろん真摯にこの問題に向き合っている社があることも知っているのです、その成果に期待しています。

ともあれ、受賞論文を端緒とする一連の研究では、2014年夏の着手以来2年2ヶ月で5本の論文を公刊することができました。小林君と初めて会ったのは彼がM1だった社心大会で、その第一印象は「なんという無礼なヤツ。許せない」でしたから、長じてこうした共同研究ができる関係になれるとは正直意外で、人生とは面白いものだと思っています。これからも刺激的な研究成果を世に問うために、一層精進いたします。

(みうら あさこ・関西学院大学)



小林哲郎

この度は奨励論文賞を頂き、誠にありがとうございます。大変光栄です。学会大会での三浦先生の受賞コメントにもありましたように、この研究はツイッター上でのやり取りに端を発したものでした。その後は三浦先生の超人的な研究推進力によりあっという間にデータ収集と分析が進み、気づいたら論文になっていたというのが実感です。しかし、短期間で書き上げた論文とはいえ、これからの日本のオンライン調査・実験における重要な問題を指摘することができたのではないかと考えております。

私は2000年代初頭のオンライン調査黎明期からこの方法論に関心を持ってきましたが、ますます多くの研究者がオンライン調査を使うようになった一方で、本当にこのデータ収集方法は大丈夫なのだろうかという気持ちも大きくなってきていました。今回の論文は、アカデミアだけでなくオンライン調査業界からも一定の反応がありました。その多くはディフェンシブな反応であり、我々の論文をきっかけにデータの質が劇的に変わったわけではないと思いますが、研究者が単に調査を発注するだけのクライアントに留まるのではなく、オンライン調査の質という側面で業界とのコミュニケーションの回路を開いたという点には多少なりとも意義があったかと思えます。

社会心理学に限らず、政治学や経済学などでもオンライン調査を使う研究者が増えてきています。学術調査がマーケットで一定程度の規模を占める以上、研究者と業界が協力して質の高いデータを得られる調査環境を作っていくことが望ましいと思います。そうした試みの一環としての本論文に評価を頂いたという意味においても、今回の受賞は大変励みになります。どうもありがとうございました。

(こばやし てつろう・香港城市大学)

岩谷舟真

この度は、社会心理学会奨励論文賞を頂き、大変嬉しく思います。また、それと同時に、少し恐縮する気持ちも抱いています。ご多忙の中、論文に目を通し評価を行ってくださった、選考委員の方々に感謝致します。ありがとうございました。

本論文は、多元的無知状態を実験室内に再現し、その生起メカニズムや帰結を解明することを目指した論文です。研究にあたっては、対応バイアス・認知的不協和といったマイクロレベルの現象と、多元的無知というマクロレベルの現象との連関を探ることを目的に、複雑でありながらも緻密な実験を行うよう心がけました。内容は論文ニュースや本論文に譲り、ここでは論文完成に至るまでの苦労した点について記したいと思います。

この論文は、私の卒業論文を基にしており、私にとっては初めて行った実験です。当時は、社会心理学を専門にしておよそ1年しか経っておらず、何が問いとして立ちうるのかさえも分かっていなかったという点において、序論部分でも苦勞しました。しかし、今となればそれ以上に方法面での苦勞が印象に残っています。全ての実験セッションに実験協力者(サクラ)を集めることは想像を超えて大変でしたし、実験参加者の回答に応じた教示を行ったり、また回答に応じて異なる実験材料(グミ)を提供したり、と実験に際してかなり神経を使うことになりました。さらに、こうした実験内容を言葉や文字にして伝えることは、実験遂行以上に困難で、社会心理学会の口頭発表ではおそらく内容が伝わらなかったために座長以外からの質問がありませんでした。論文執筆にあたって、より多くの方々に内容が伝わるように卒業論文を「翻訳」し、第1稿を投稿するに至るまでおよそ10ヶ月の期



間を要しました。方法が伝わるかどうか本論文の肝であることを理解しながらも、序論や考察などの理論的な側面ではなく、方法面でのテクニカルな(実際は非常にアナログな方法ですが...)部分の執筆に苦勞している自分に対して、一体自分はどこに力を入れているのだろうともありました(論文執筆で1番伸びた能力は、社会心理学に関する専門的な力ではなく、分かりやすく日本語を書く力だと思います)。それだけに、受賞の知らせを聞いたときの喜びはひとしおであり、同時にあの実験の苦勞や執筆の苦勞も報われたのだと安堵する自分もいました。

最後になりましたが、共著者であり指導教員の村本先生に感謝致します。当時は学部生だった自分と時に1対1のディスカッションを行いながら、研究実行まで導いてくださりました。また、論文執筆においても、基礎の基礎から赤入れやコメントを下さりました。少しぐらいは読める日本語を書けるようになったかと思います。さらに、研究室ミーティングで建設的なコメントを下さった皆様、実験材料(グミ)の購入などでお世話になった秘書さん、貴重なコメントを下さった査読者の皆様の全てに感謝します。期待を込めての奨励賞、と認識しているので、少しでも期待に沿えるよう、また期待を超えられるよう、研究に打ち込みたいと思います。ありがとうございました。

(いわたに しゅうま・東京大学)

高史明

この度は拙著『レイシズムを解剖する:在日コリアンへの偏見とインターネット』を高く評価していただき、ありがとうございました。

本著に掲載した最初の研究を行ったのは2008年のことで、インターネット上でのレイシズムの蔓延を前に、社会心理学を学ぶ者の一人としてできること、するべきことがあるはずだと、この道に踏み出しました。安定した職も予算もなく肝心の研究能力も未熟、と無い無い尽くしだった私がこの研究を遂行するためには、非常に大きな努力と、それ以上の忍耐が必要でした。また、妻(兼共同研究者)、友人たち、研究仲間の力添えも必要でした。そうしてようやく世に問うことができた成果が今回このような形で報われたことに、心からの喜びと安堵を覚えています。



この本で扱った在日コリアンへのレイシズムのような“生臭い”——社会問題に直結した、政治的にセンシティブな——問題を、日本の社会心理学者は積極的には扱ってこなかった、むしろどちらかという避けてきたように思います。少なくとも、隣接領域の社会学や、あるいは海外の社会心理学と比べると、日本の社会心理学においては“生臭い”問題の研究は際立って少ないし、またそうした中で行われてきた既存の研究も十分には評価されていないと思います。

それがどの程度、面倒なことには関わりたいか、単に関心を持ってないといった理由によるものかは分かりません。ですが私は、そうした要因以上に、「科学者としてイデオロギーや政治に従属せず客観的でありたい、“生臭い”問題を扱ってそれができなくなってしまうのは避けたい」というある種の“誠実さ”こそが根底にあるのだと、社会心理学者の一人として信じています。

しかしこの本を読んでもいただければ、科学者として誠実であることと“生臭い”問題を扱うことは両立すると分かっていたはずだと、そういう本を書くことができたはずだと、自負しています。この本は、テーマが馴染みのないものであるという点を除けば、社会心理学を研究する皆さんにとって、決して目新しいものではないはずですが。社会心理学者の使い慣れた手法と議論の進め方を丁寧に——授賞式では“緻密”と評価していただきましたが——用いるだけで、こうした“生臭い”問題を“解剖”し、価値のある研究ができるのだと、分かっていたはずだと思います。「この程度なら(時間をかけさえすれば)自分でもできそうだ」と思っていたら幸いです。

ではこうした“生臭い”問題を扱うことには何も特別なところはないのかと言うと、もちろんそうではありません。私は自分が書く文章が誰かを、特に社会的に立場の弱い人々を不当に傷つけることになるのを、常に怖れています。この本を出版するにあたり最も怖れていたのも、そのことでした。科学者としての客観的なスタンスで問題を取り扱うことが、在日コリアンを傷つけるのではないかと、現に自分たちが傷つけられているときに「現状を客観的に分析しよう」と悠長に構えることができる他者の存在がどれほど疎ましく感じられるかは、誰でも容易に想像できるものかと思います。

ですが、少なくない在日コリアンが、私の仕事を好意的に評価してくれました(もちろん人それぞれであるし反感を抱いた方もいるでしょう)。ある在日の女性は週刊誌の書評で、得体の知れないものに名前があることを知るだけでもホッとすると、現実に存在する嫌な霧のようなものの姿がえぐり出され丁寧に腑分けされることは心地よいのだと、評してくださいました。まさに、私が科学者という立場を徹底できる限り客観的な“解剖”を試みたその点に、価値を見出してもらえたのです。ですので、社会心理学者がこうした“生臭い”問題を扱おうとするとき、“科学者”として振る舞うことは——相応の丁寧さや慎重さを伴えば——研究の社会的な意義を損なうものではないと、私は考えています。

ところで、読んでいただければ分かる通り、私の研究は、国外におけるレイシズム研究の水準に比べると遥かに初歩的な段階に留まっています。膨大な研究が積み重ねられてきた国外の水準に追いつき追い越すことは私の力量には余る課題であり、この本、そしてその前身となった博士論文を執筆する上で私が目指したのは、新奇な理論を提唱することでも大胆な予測を検証することでもなく、これから多くの社会心理学者と社会心理学を志す学生たちが研究を行っていくための信頼できる足場を築くことでした。ようやく足場ができたばかりのこの未開のフィールドでは、数多くの研究課題が、皆さんに発見され、掘り起こされるのを待っています。私の研究とそれが今回このような形で表彰していただけたことをきっかけに、研究が盛んになされるようになり、社会心理学という素晴らしい学問が今まで以上にその真価を発揮することを願っております。

(たか ふみあき・東京大学/神奈川大学)

大淵憲一

この度は出版賞を受賞させていただき、ありがとうございます。本書が純粋の学術書ではなく、実用書の側面を持つもので、こうした出版物に目を向けていただいたことに対して審査員の方々に感謝申し上げます。正直なことを申し上げますと、受賞のご連絡をいただいたとき、一瞬、私のような

晩期の研究者よりも、伸び盛りの若手研究者に与える方が有意義ではないかと、三島由紀夫賞でしたか、慚然たる受賞スピーチをした蓮見重彦氏のことが頭をよぎりましたが、すぐに、喜びの気持ちに切り変わりました。

私は2016年の春、東北大学を退職しました。在職中、私のもとで二十数名の方が博士課程で研究をされました。学位取得後、その方々はみな大学等で研究に携わっていらっしゃいますが、その中で、謝罪を研究テーマにされている方は一人もいらっしゃいません。私自身は、かなり以前から謝罪に関心を持っていたのですが、テーマがマニャク過ぎて、将来性のある若手研究者向きではないと思ったことから、彼らには勧めなかったのです。ほぼ一人で続けてきたテーマだったので、指導学生の中にも、ぼくが謝罪の研究をしていることを知らない人がいるのではないかと思います。

謝罪は極めてありふれた対人現象です。日本人であれば誰でも、「済みません」とか「申し訳ありません」といった謝罪の言葉を口にしない日はないと言ってもいいのではないでしょう。しかし、この日常的な行動がなぜ起こるのか、それがどのような効果を持つのか、また、その背後にどのような心理社会過程が働いているのかに関しては、これまであまり明らかにはされて来ませんでした。身近な対人現象を取り上げて、そこから人間の普遍的な心理過程を探るというのは社会心理学のもっとも有効なアプローチの一つと思われませんが、謝罪もまた、これに相応しいテーマであったと思います。

謝罪には顕著な文化差があることから、謝罪の研究は自ずから文化研究の側面を持つようになりました。日本人は謝罪好きで、これは本書の中でも紹介している東北学院大学のロング教授の研究なのですが、他の人から援助をしてもらったときなど、欧米人なら「ありがとう」というところを、日本人は「済みません」と言うことが多いのだそうです。私たちの研究でも、日本人は自分が人に迷惑をかけたとき謝罪を最優先で行うし、自分が被害者の時は、加害者からの謝罪を強く期待し、また、謝罪されると癒され、相手を赦そうとするなど強い謝罪選好を示します。

不祥事を起こした団体が頻繁に謝罪会見を開くのも、日本社会の特徴なのではないでしょうか。本書は、私の著書の中では珍しく、一般メディアの注目を集め、何度か取材も受けましたが、そこからも謝罪が日本の顕著な社会現象の一部となっていることがうかがわれます。この意味で、謝罪心理は日本文化の深層に繋がっていくところが面白いところだと思います。

細々と続けてきた謝罪の研究成果を最初にまとめたのは、本書の5年前に東北大学出版会から刊行した『謝罪の研究』です。この本を見た編集プロダクションのムーブが「もっと実用的な本を書いたらどうか」と提案してくれ、CCCメディアハウスという出版社を見つけてくれました。実用的と言われても、学者なのでどうしても学術面を基盤にした論述になり、私の最初の原稿はだいぶ硬いものだったようです。ムーブの編集者、加藤亜佳峰さんが一般読者向になるよう表現に手を入れてくれました。その意味で、本書の刊行にあたって加藤さんから有益な援助を得たことを記し、感謝の意を表したいと思います。

(おおぶち けんいち・放送大学宮城学習センター)

第60回公開シンポジウム・開催報告

2016年11月19日(土)に富山大学人文学部で第60回公開シンポジウム「幸福感の社会心理学—富山県、福井県、石川県に住む人々の幸福感はなぜ高い?!—」が開催されました。3名の話者提供から、地域の幸福について社会心理学的に考えるための視点が、豊富なデータと共に示されました。黒川光流先生をはじめ、開催にご尽力下さった方々に心より感謝申し上げます。

参加記



2016年11月19日(土)、富山大学で行われた日本社会心理学会2016年度第60回公開シンポジウムに参加しました。私の住んでいる福岡から陸路で約6時間、飛行機で北海道へ向かうよりもはるかに長い道のりです。「幸福感の社会心理学—富山県、福井県、石川県に住む人々の幸福感はなぜ高い?!—」と題された本シンポジウムは、北陸3県の幸福度が高いという社会経済統計データの報告を受けて開催されたものです。

1人目の話者提供者は、富山福祉短期大学の竹ノ山圭二郎先生でした。「高度差4000mの幸福:ニッポン的“富山人”と富山型福祉」というタイトルで、客観的指標によって都道府県の幸福度をランキングしたデータの詳細についてご報告頂きました。具体的には、2011年に法政大学大学院幸福度指数研究会が発表した“47都道府県の幸福度に関する研究成果”と、2016年に日本総合研究所が発表した“全47都道府県幸福度ランキング”を挙げ、どのような指標によって幸福度が評価されているのか、そして、なぜ北陸3県が幸福と言われているのかをご説明下さりました。経済的豊かさや労働の現状、住まい環境などの様々な側面が評価対象となっていました。どの指標を見ても富山県が軒並み良い順位に位置していることが印象的でした。最後に、富山型デイサービスや臨床美術(富山福祉短期大学の取り組み)などといった富山県特有の福祉システムをご紹介下さり、富山県が幸福とされる理由について富山県在住という立場からまとめて下さりました。

2人目の話者提供者は、富山県のご出身である静岡大学の小杉素子先生でした。「ふるさとの内と外:幸福感はどこから来るのか」というタイトルで、客観データと主観データの比較についてご報告頂きました。具体的には、竹ノ山先生にご紹介頂いた統計データに対して、主観的幸福感のデータ(地域しあわせラボによる“地域しあわせ風土調査”)は一致する結果なのか、乖離しているのならどのような点が異なるのかをご説明下さ



秋保亮太

りました。衣食住に関しては客観データと一致するように高評価であったのに対し、自分たちを謙遜するような形で低評価が下されている側面もあり(e.g., 積極性・意欲に欠ける, 他者の目を気にしてしまう), 県民性がうかがい知れるようでした。加えて, 他の主観データ(ブランド総合研究所による“出身都道府県に対する愛着度”)と合わせて, 衣食住の不便・不快が少ないこと(マイナスの減少)が地元への愛着・自慢(プラスの増加)とは関連しない可能性とその理由について考察されていました。客観データと主観データそれぞれの特性を十分に理解した上で使い分けることの重要性を改めて知る良い機会となりました。

3人目の話題提供者は, 京都大学の内田由紀子先生でした。「地域の幸福とは何か: 文化心理学からの考察」というタイトルで, 文化心理学における幸福研究についてご報告頂きました。具体的には, 幸福の多義性と測定の問題点を挙げ, 綿密な分析の必要性をご説明下さりました。幸福の持つ意味は文化によって異なるために一元的な比較が適さないというお話は, 他の多くの概念にも同様に当てはまるものであり, 意味の多様性を無視して一緒に検討してしまうことの危険性を表しているように思います。また, 個人の主観的幸福感と地域住民の主観的幸福感に対する認知の間には相関があり, 個人と集団が不可分であることもご紹介頂きました。これは, 私の行っているチームワーク研究にも通じるものがあり, マルチレベル分析などといった的確な分析を用いることの必要性を改めて認識する良い機会となりました。



今回, 3名の先生から, 幸福に関する様々なお話を伺うことができました。幸福は主観的なものであり, 他者が簡単に決めつけられるものではありません。このような幸福を扱うことの難しさは, 今後の研究課題であり, それと同時にこの分野の発展可能性を示しているのではないかと思います。最後に, 富山の海産物がどれも美味しく, 個人的にはとても幸福な旅だったことを申し添えさせていただきます。(あきほ りょうた・九州大学)

1958年の第1回「社会心理学と隣接諸科学」以来, 長年開催されてきた公開シンポジウムですが, 今回でいったん休止となります。とはいえ, 社会心理学の知見を広く周知, 還元する試みをやめるわけではありません。これからの新しいスタイルでの試みにもご期待・ご参加下さい。

新規事業委員会 大会前夜祭企画・開催報告

第57回大会前日に, 2014年度に実施した夏合宿セミナーと同路線の企画として, 若手を中心とした事前予約制(定員50名)の大会前夜祭企画「社会心理学の明日はどっちだ!」が開催されました。第1部は「境界を超える人生」と題して, 複数の領域を超えて活躍する気鋭の若手研究者である出馬圭世(ヨーク大学心理学部), 高橋英之(大阪大学基礎工学研究科)のお二人を講師としてお迎えし, 社会心理学を知る外部者の視点から, 社会心理学者が外へ出て行くために何が重要だと考えるかを語っていただきました。また, 第2部のラウンドテーブルディスカッションでは, 会員4名(石黒格, 竹澤正哲, 清水裕士, 石井辰典)が各自の研究を例にしながら社会心理学という領域の外に飛び出そうと奮闘している現状について語り, 講師も交えた議論が展開されました。第3部の懇親会はフリーフォーマットの大放談会となり, 参加者相互の活発な交流が図られました。ここでは, 講師の高橋氏による「感想」という名の熱いエールと, 会員による参加記をお届けします。

感想

高橋英之

この度は大変刺激的で勉強になる企画へ声をかけてくださり, 社会心理学会の新規事業委員会のみなさまには感謝の言葉しかない。しかし正直, 竹澤先生から, 「社会心理学の明日はどっちだ!」というイベントで喋らないかと初めて連絡が来た時, 大きな戸惑いを覚えた。なぜならば自分自身の明日がどっちか全く分からない日々を過ごしているのに, ある学問分野の明日がどっちなのかなど分かるはずがない, と思ったからである。それと同時に, 学問分野の明日を考えること自体についても若干疑問を感じるがあった。例えば90%の人達が「社会心理学の明日はあっちだ!」という同意に至ったとしても, その同意に至らない10%の人達は反発して, 学問分野に窮屈さを感じてしまうかもしれない。では逆に, みんなが学問の明日を考えずに好き勝手に一人称的に研究を続けられれば自由で幸せなのだろうか? いや, そんな学問分野は周囲からモラトリアム集団と思われ研究費が投入されなくなり, そこに集う若者の可能性と一緒に萎んでしまうであろう。結局, 自分自身の一人称的価値だけに従って生きていても, みんなで共有された三人称的価値だけに従って生きていてもどこかで心に無理が生じるのであろう。ではどうすればいいのか? アリストテレスは中庸の精神の中に真実があると言った。結局, 我々にできることは一人称的な個人の価値と三人称的な社会的な価値の狭間の中をうろろと迷い続けてどこかにあるかもしれない真実に至る道を探し続けることだけではないであろうか? それは孤独な旅であろうし, たぶんどこにも分かりやすい正解なんて存在しない。それでも誰かが提供してくれる“みせかけの正解”に飛びつかずに, より幸せな未来に希望を託し, 迷い続ける勇気を保ち続けることこそが, きっと個人の, そして学問の明るい未来に続くのだと思う。そういう個人の勇気を支える上でも, 学会が未来を担う若手に希望を与え続けることは不可欠であると思う。そういう意味で, 今回の挑戦的な若手向けの企画は, それ自体が社会心理学の未来であり, 可能性であったと思う。自分が学者としてのバイブルだと思っているマスターキートンという漫画で, 主人公のキートン先生もこんな台詞を言っている。「お父さんまだ人生の達人どころか, 自分の人生もわからない。でも, あの時の海の色は忘れない」。どうやって学問のカラフルさを忘れずに前に進み続けていけるのか, それを考え続けることが学問を紡ぎ続けている我々の宿命であろう。(たかはし ひでゆき・大阪大学)

参加記

井上裕香子



2016年9月16日(金)、日本社会心理学会第57回大会の前日、大会前夜祭企画として「社会心理学の明日はどっちだ!」が行われました。実は私は、事前に参加を募集していた段階では登録を逃し、直前にキャンセル待ちの最後の枠に滑り込んだ立場だったのですが、参加直後の率直な感想としては「登録しなかった自分を殴りたい」でした。これほどエキサイティングな企画は初めてで、本当に参加して良かったと思っています。

このイベントは若手向けということで、学生や院生へのメッセージを強く意識した構成になっていました。一般的な講演会では、当然ですが研究そのものを発表することに重点が置かれます。しかしこのイベントでは、研究の内容以上に、その研究に至ったプロセスを重視した話がされていました。そのため、単なる研究発表ではなかなか表に出てこないような、発表者である先生自身の考え方や、さらには先生自身の研究者としての生き方まで垣間見ることが出来ました。

第1部では、なぜ今の研究を選んだのか、出馬圭世先生と高橋英之先生が発表してくださいました。いずれもアプローチの方向性は違いましたが、大学院生に伝えたいことがぎゅっと詰まった発表でした。出馬先生の発表では、研究者として生き残るためにどうしていくかというのを考えさせられ、高橋先生の発表では研究への情熱を大切にしなければいけないと改めて感じました。そして第2部では、ラウンドテーブルディスカッションが行われました。4人の先生方の発表という形はとっていましたが、発表20分、質疑20分という議論に重点を置いた構成で、講義というよりも意見交換の色が強かったように思います。そしてこちらでも、「何が分かったか」よりも「なぜこの研究をしようと思ったのか」に重点が置かれ、そこも含めた活発な議論がなされていました。第3部は懇親会で、若手同士の交流も、発表者の先生方のお話も出来る、まさに「フリーフォーマットの大放談会」でした。私自身は同年代の参加者との新たな繋がりも作れ、先生方に自分の研究内容をお話することも出来て、非常に有意義な懇親会となりました。

今回のセミナーでは、登壇された先生方の研究者としての生き様を見せていただいた気がします。その生き様はそれぞれ違いますが、全ての先生方に共通しているのは、自分の軸をしっかり持っているということでした。ともしると目の前の作業に追われて、自分の軸が何かなど考えることすら忘れてしまう私にとって、今研究者として活躍されている先生方の軸に触れるというのは強烈な体験でした。自分は研究者として何を売りにするのか。何のために研究するのか。自分がこれからどのような研究者を目指すかについて考える良いきっかけとなりました。まだ自分の軸がはっきり定まったとは言いがたいですが(今もこの参加記を書きながら自問自答しています)、今後研究者として生きていくために、自分の軸を早く確立し、それに従った研究を自分で生み出せるようになりたいと強く思いました。

最後に、このような素晴らしい企画を立案・開催して下さった新規事業委員会の方々に心から感謝します。またこのような企画が開催されることを強く願いながら、参加記を締めたいと思います。ありがとうございました。

(いのうえ ゆかこ・東京大学)

大淵憲一先生・紫綬褒章受章



大淵憲一先生が、平成28年秋の褒章(2016年11月3日発令)で紫綬褒章を受章されました。紫綬褒章は、科学技術分野における発明・発見や、学術及びスポーツ・芸術分野における優れた業績等に対して授与されるもので、大淵先生の「社会心理学・犯罪心理学研究」の業績が高く評価されたものです。大淵先生、おめでとうございます。

大淵憲一

こうした受賞の通知が届けば、誰でもそうでしょうが、私も驚愕し、「何かの間違ひではないか」と疑念に囚われ、実感を持つようになるまでしばし時間がかかりました。その後、マスコミの取材に対し、自分がこれまでどのような研究をしてきたのか、概要を説明しなければならなくなりました。それまでは余り考えたこともなかったのですが、多分、概要としては、人間の攻撃性に関して実験や調査など実証的アプローチで基礎的研究を行い、その成果をもとに、犯罪心理や紛争解決などより実践的な分野で応用研究を進めてきたとなるのではないかと思います。

他の社会心理学者の方々と比較して、私の特徴と言えることがあるとすれば、実践分野で様々な活動をしてきたことではないかと考えられます。犯罪心理分野では、著書や講演などを通して、警察官、法務技官、家裁調査官など司法専門職の養成に関わってきましたし、紛争解決分野では、研究成果をもとに弁護士や行政書士など法律家たちの紛争解決実務に多少なりとも支援ができたのではと思っています。こうしたことが評価の対象の一部になったのではないかと、自分自身では思っています。

自分の研究概要をまとめてみると、成果のほとんどは、大阪教育大学や東北大学在職中、学生たちとの共同研究から生み出されたものであることに改めて気づかされました。私のもとで学位を取った人たちのほとんどは、現在、大学等の研究機関に勤め、攻撃性、紛争解決、犯罪心理などの分野で活発に研究を続けています。その意味で、今回の受賞は彼らとの共同所産に対する荣誉であつたらうと感じるとともに、この分野に注目していただいたことで、研究の更なる発展が図られることを期待したいという思いです。

最後に、私自身と学生たちが長年お世話になり、切磋琢磨の機会を与えていただいた日本社会心理学会に対し、この機会に感謝申し上げます。

(おおぶち けんいち・放送大学宮城学習センター)

広報委員責任編集コンテンツ(5)「拡張版「社会心理学が学べる大学」」

清水裕士

企画主旨

今年の夏ごろから、広報委員会の Web サイトにて、「社会心理学が学べる大学」というページを設けました。すでに多くの会員の皆様に情報をいただいている、コンテンツが充実しつつあります。まだまだ募集しておりますので、ぜひご登録ください。

しかし、私自身も登録した時に思ったのですが、100字という制約がとてつらい！Twitterでの広報も意図しているためこのような制約になっているので仕方ない部分もありますが、せっかくの広報の機会なのにちょっともったいないなと思っていました。

また、私自身が今の大学に赴任して2年目になり、自分のゼミを持つようになって、ゼミ運営どうしようかと悩むことも増えてきました。と、同時に、これから大学に就職していただく後輩研究者にとっても「ゼミの運営どうするか」という問題は共通の悩みになるのかなとも思いました。もちろん、ベテランの会員のみなさまにとっても尽きない悩みの種であろうと思います。

そこで、みなさまの大学、研究室をより一般の人に、そしてほかの会員にも知ってもらえるよう、もう少しつつこんだ広報をしようと思いいたりしました。というのは表の目的で、実際は広報委員企画を利用して「みんなどうやってゼミ運営しているのか」という情報を集めてやろう！という裏の目的もあったりします。国立大学、私立大学、心理学部がある大学、おひとりで社会心理学を支えておられる先生方など、多様な情報が集まるといいなと思って企画しました。

というわけで本企画は、拡張版「社会心理学が学べる大学」というものになります。コンテンツはすでに社会心理学を学べる大学に登録をされていて、メールアドレスがわかる会員の方にアンケートへのご協力をお願いして集めさせていただきました。ご協力いただいた会員の皆様、ありがとうございました。

質問内容は、1. 研究室、ゼミの特徴(研究テーマ、学べる内容)、2. ゼミ運営で工夫している点とその成功例など、3. ゼミ所属を希望する学部生、大学院生に向けてのメッセージ、の3つです。

そして誤算・・・Web ページ掲載へ

以上の企画で進めてきたのですが、私の計算の甘さが出てしまいました。そう、思いのほか皆様アンケートにご協力いただいた上に、熱いゼミ運営魂をぶつけていただいたかきもあって、見事にページ数が(膨大に)超過したのです。三浦麻子広報委員長からの「これどうすんの」(実際はそんなこと言われていない)的な視線を感じながらワタワタしつつ、これまでの「社会心理学が学べる大学」の Web ページからリンクを張らせていただくことで対応することとなりました。PDF 会報ならではですね。本当ならば全文を会報に載せてお届けしたかったのですが、申し訳ありませんでした。

拡張版「社会心理学が学べる大学」(広報委員会 Web サイト)

様々なゼミ運営方略

いただいたアンケート結果をまとめようと思ったのですが、思った以上に「多種多様な」方針でゼミや研究室が運営されていることがわかりました。学部生をメインに指導している研究室では、社会心理学の楽しさを知ってもらうこと、研究をやり遂げることの達成感を感じてもらうことなど、学生を卒論にうまく「のせて」いくには、というアイデアが多いようです。また、心理系学部の演習や実習などのカリキュラムについて紹介していただいたりしてとても参考になりました。一方、国立大学の院生メインの研究室では、院生をどうやって一流の研究者に育て上げるかについて、考えぬかれた運営が行われているようです。外部のスピーカーを呼ぶ研究会の開催、英語でのミーティング、研究進捗報告会、学生との密な連絡手段など、様々です。

ゼミ運営はどうしても学生のレベルや学部生・院生の比率などによって変わってきます。それぞれの環境に合わせてどう最適化するかにについて、みなさまの参考になれば幸いです。

ご協力いただいた大学・研究室の皆様

なお、順番はメールを送っていただいた順です。また表記は大学+学部、研究室名(記事執筆者の方の氏名・敬称略)となっています。それぞれ、広報委員会 Web サイトに掲載させていただいた記事にリンクしています。

- 山口大学教育学部教育学部 小杉研究室(小杉考司)
- 関西学院大学文学部・大学院文学研究科 社会心理学研究室(三浦麻子)
- 神戸大学大学院人文学研究科 社会心理学ゼミ(石井敬子・大坪庸介)
- 東京大学大学院人文社会系研究科 社会心理学研究室(亀田達也・唐沢かおり・村本由紀子・白岩祐子)
- 広島大学総合科学部・大学院総合科学研究科 社会心理学研究室(坂田桐子・小宮あすか)
- 朝日大学大学院経営学研究科 社会心理学研究室(畦地真太郎)

- 東亜大学芸術学部・大学院総合学術研究科 被服心理学研究室(平松隆円)
- 山梨大学大学院総合研究部教育学域 尾見康博研究室(尾見康博)
- 広島修道大学健康科学部心理学科 (2017-) 社会心理学研究室(中西大輔)
- 関西学院大学社会学部・大学院社会学研究科 社会心理学専攻分野(稲増一憲)
- 名古屋大学大学院教育発達科学研究科 五十嵐祐研究室(五十嵐祐)
- 北海学園大学経営学部 社会心理学研究室 古谷ゼミ(古谷嘉一郎)
- 富山大学人文学部心理学コース 黒川光流研究室(黒川光流)
- 同志社大学心理学部 中谷内研究室(中谷内一也)
- 大妻女子大学人間関係学部人間関係学科 社会・臨床心理学専攻(田中 優・堀 洋元・本田 周二・八城 薫)
- 広島大学大学院教育学研究科心理学講座 社会心理学研究室(森永康子・中島健一郎)
- 上智大学総合人間科学部 社会心理学研究室(樋口匡貴)
- 東海学園大学人文学部心理学科 伊藤君男研究室(伊藤君男)
- 帝京大学文学部心理学科 堀田研究室(堀田結孝)

みなさまご協力ありがとうございました！

(しみず ひろし・関西学院大学)

『社会心理学研究』 過去巻号の J-STAGE 公開・進行中

『社会心理学研究』は第30巻からJ-STAGEでの電子ジャーナルの運用を開始しており、第32巻からは早期公開も実施しています。現在、第1巻から第29巻までの過去巻号についても、J-STAGEでの公開作業が進んでいます。2016年度中にはすべての巻号がJ-STAGEで閲覧できるようになります。どなたでも無料です。なお、従来PDFによる本文収録を実施してきたCiNiiが2017年3月でサービスを終了することに伴い、CiNiiでのPDF提供は第30巻1号までとなり、以降の巻号の論文は要約までの掲載となりますので、ご了解下さい。

J-STAGE「社会心理学研究」URL: <https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jssp/-char/ja>

会員異動 (2016年9月16日～2016年12月15日)

入会

《正会員》

・一般

上岡正明(多摩大学大学院情報経営学部MBAコース)、西村律子(愛知淑徳大学心理学部講師)

・大学院生

天野靖信(放送大学大学院文化科学研究科)、石山裕菜(同志社大学大学院心理学研究科)、井関紗代(名古屋大学大学院環境学研究科)

《準会員》

増山和秀(大手前大学現代社会学部現代社会学科)

退会

石田有紀

自然退会

青木健一、赤見千尋、浅井義弘、飯嶋 慧、稲垣亮子、尹 月、請園正敏、王 潔、太田洋介、大塚光太郎、岡崎奈々、岡鼻千尋、榎野 潤、菅知絵美、木戸彩恵、清田尚行、グエン・タン・トアン、小林進一郎、雑賀玲衣、齊藤光治、佐々木和華子、佐藤 徳、鄭 珪熙、新谷健介、須恵明音、末吉南美、田尾雅夫、高浦佑介、高橋健太、高橋泰城、高森順子、瀧沢絵里、田嶋清一、土井聡子、戸田山和久、富岡直子、中原洪二郎、夏堀百合奈、根本隆行、萩原 遥、白 晶、早川裕矢、原久美子、原奈津子、藤田綾子、藤田達雄、舟戸貴織、本間元康、米田祐介、間山広江、三浦亜利紗、三ツ矢慎平、宮本 真、矢野麻梨奈、矢野裕理、山内みどり、山田富美雄、山中咲耶、弓場美佳子、渡邊幹代、SHEN HAO、趙紫薇

所属変更

大淵憲一(放送大学宮城学習センター所長)、田戸岡好香(長野県短期大学助教)、橋本剛明(東京大学大学院人文社会系研究科特任助教)、森 康浩(宮城学院女子大学学芸学部心理行動科学科)、園田由紀子(東海大学教育開発研究センター)、中嶋智史(国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神薬理研究部流動研究員)、増井啓太(追手門学院大学心理学部特任助教)、瀧上康幸(小倉少年鑑別支所支所長)

『社会心理学研究』掲載予定論文

第 32 第 3 号(2016 年 3 月刊行予定)

《資料》

石井辰典・竹澤正哲 心的状態の推測方略—投影とステレオタイプ化—

編集後記

今号は、第 57 回大会、新規事業委員会による前夜祭、そして公開シンポジウムと、多くのイベントに関する記事で盛りだくさんとなりました。そのため、広報委員責任編集コンテンツにお寄せいただいた入魂の記事を「続きは [Web](#) で」にせざるを得なくなったこと、申し訳ありませんでした。無事刊行にこぎ着けることができたのは、2 つもコメントを書いて下さった大淵先生をはじめとするすべての方々が、お願いしたことを遵守して下さったおかげです。心より感謝申し上げます。読者の皆様におかれましては、是非読後感を各執筆者にお寄せいただければ幸いです。では、よい年末年始をお過ごし下さい。(asarin)